

# 新後撰和歌集

卷第三

夏歌

夏歌の中に

藤原景綱

ほたるとぶ難波のこやのふくる夜に  
たかぬ芦火の影もみえけり

夏歌の中に

鷹司院按奈

千はやぶる神だにけたぬ思ひとや  
みたらし河にほたるとぶらん

深夜虫を

左兵衛督信家

ふけ行けばおなじほたるのおもひ川  
ひとりはおもえぬかげやみゆらん

弘安元年、百首歌たてまつりし時安嘉院四条

たきつ瀬にきえぬ蛍の光こそ

おもひせくとはよそにしらるれ

建長三年秋、吹田にて人人歌つかうまつりにけるに

後嵯峨院御製

いたずらに野沢にみゆるほたるかな

窓にあつむる人やなからん

題しらず 前中納言俊光

夕やみはおのが光をしるべにて

このしたかくれゆくほたるかな

題しらず

前参議実俊

夏草のしげみの葉ずる暮るるより

光みだれてとぶ蛩かな

卷第九  
积教歌

煩惱即菩提の心を  
今出院近衛

思ひきや袖につつみしほたるをも

衣のうちにかくるたまとは

「国歌大観」より